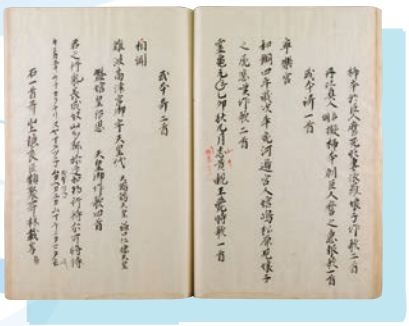
DRAW YOUR ASIA
KU-ORCAS
関西大学
アジア・オープン・
リサーチセンター
KANSAI UNIVERSITY OPEN RESEARCH CENTER for ASIAN STUDIES

KU-ORCAS NEWS LETTER No5

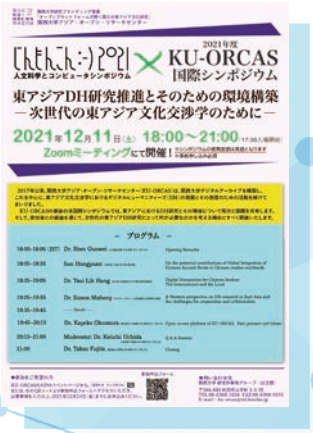
CONTENTS

センター長挨拶……P2
活動報告……P3
学長×センター長×前センター長 特別鼎談…P4
ユニット別活動レポート……P8
KU-ORCAS研究集会開催レポート……P10
KU-ORCAS国際シンポジウムレポート…P11
京都国立近代美術館での展覧会開催…P12
これまでの研究成果……P14



世界的な東アジア文化研究を牽引するKU-ORCAS

オープン・プラットフォームが開く 関大の東アジア文化研究



センター長挨拶

関西大学アジア・オープン・リサーチセンター長

池国威

関西大学アジア・オープン・リサーチセンター（KU-ORCAS）は、私立大学研究ブランディング事業として、2017年11月に採択され、今年度は５年目の研究プロジェクトの最終年度となりました。思い起こせば、５年前の2017年、人と世界に開かれたデジタルアーカイブの構築とその活用を目指し、本センターを立ち上げました。私たちは、関西大学の東アジア研究の長い伝統とこの十数年来の目覚ましい研究実績に基づき、「デジタル技術に裏打ちされた東アジア研究のオープン・プラットフォーム」を目標に、デジタル・ヒューマニティーズの手法による東アジアの言語、思想、歴史等に関する研究に情熱を傾けて参りました。

私たちの道は、決して平坦なものではありませんでした。５ヵ年の計画としてスタートした研究ブランディング事業は、2019年２月に、補助金支援の終了となりました。また2020年２月以降は、今度は新型コロナウィルスの影響を受けました。幸い、関西大学の法人と教学からの全面的な支援を引き続き得ることができ、コロナ禍という極めて困難な状況下、メンバー全員が当初の計画を厳守し、着実に研究成果を挙げてきました。

最終年度でも、私たちは、KU-ORCAS2021研究集会「日本におけるパブリックヒューマニティーズ／公共人文学の現在地」（2021年11月12日、パブリックヒストリー研究会との共催）、国際シンポジウム「近代の“西餐”、“洋飯書”及び“大餐館”」（2021年11月18～19日、復旦大学歴史学部との共催）、国際シンポジウム『東アジアDH研究推進とそのための環境構築――次世代の東アジア文化交渉学のために』（2021年12月11日、じんもんこん2021と共催）などのイベントを積極的に開催し、世界に向けて発信を続けてきました。また５年間の研究成果を収載した論文集「KU-ORCAS論集」も公刊になりました。

2022年３月をもって研究プロジェクト自体は一旦の区切りとなります。大学当局のご支援、事務室スタッフのご協力のもとで有終の美を飾ったと胸を張る一方、しかし、これは終結点ではなく、あくまでも通過点に過ぎません。関西大学はこの10年ほど前から、「東アジア文化交渉学」という新たな学問体系を提唱してきましたが、特に、文化交渉の観点を取り入れながら、東西学術研究所の研究課題である「東西両洋文化の比較研究」を強く進めて参りました。私たちは、関西大学の強みであるアジア学に、デジタル・ヒューマニティーズの導入と定着を促進し、日本における東洋学の新たな発展のための学術基盤を形成することを目的とする「特色ある共同利用・共同研究拠点」の申請を致しました。結果の如何に関わらず、KU-ORCASの名称をそのままにし、中国学・東洋学の研究リソースをデジタル化された形で提供し続け、それらを活用したデジタル・ヒューマニティーズのさまざまな研究モデルを継続的に発信し続ける次の時代の研究センターとして、重要な役割を果たして行く所存であります。

引き続きご協力、ご支援を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

2021

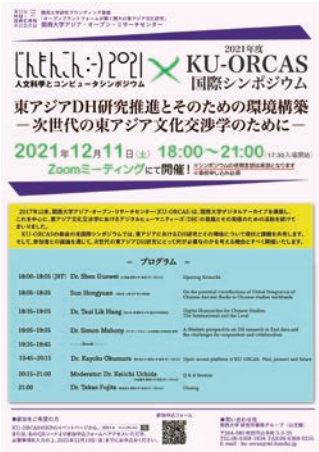
5月8日(土) SCIEA シンポジウム（於：東京・二松学舎大学）

10月30日(土)・31日(日) 東西学術研究所創立 70 周年記念シンポジウム

11月12日(金) KU-ORCAS 研究集会
「日本におけるパブリックヒューマニティーズ／公共人文学の現在地」

11月18日(木)・19日(金) 復旦大学（中国）造洋飯書イベント　内田
KU-ORCAS 国際シンポジウム
「近代の ” 西餐 ”、” 洋飯書 ” 及び ” 大餐館 ”」

12月11日(土) KU-ORCAS 国際シンポジウム
「東アジア DH 研究推進とそのための環境構築―次世代の東アジア文化交渉学のために―」



2022

3月 飛鳥の大王墓・墳墓の発掘後の図面（3D 化）整理、成果報告書の刊行、環境保存整備実施（予定）米田

3月 クラウドファンディングリターンプログラム
バチカン図書館ツアー　5 泊 7 日予定（延期）

3月 クラウドファンディング　成果報告会　小川（延期）

3月23日(水)～5月8日(日)予定 日英研究者による共同展覧会
「サロン！雅と俗― 京の大家と知られざる大坂画壇」
開催（於：京都国立近代美術館）中谷

学長×センター長×前センター長　特別鼎談

KU-ORCASが開く、東アジア文化研究の新しい未来

―貴重な研究資源を解き放つために―

2021年度で5年目の節目を迎えたKU-ORCAS。オープン・プラットフォームが開く関大の東アジア文化研究事業として、2017年度文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」に採択されて以来、さまざまな成果を上げてきた。KU-ORCASの「これまでとこれから」について、前田裕学長と前センター長内田慶市名誉教授、現センター長沈国威教授が意見を交わした。

内田 前センター長　　前田 学長　　沈 センター長

デジタルアーカイブで世界に開かれた「場」へ

前田　関西大学では、これまで文部科学省が推進する「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に、全国トップの22件のプロジェクトが選定された実績があります。その後継事業である「私立大学研究ブランディング事業」においては、学長のリーダーシップの下、大学の特色ある研究を基軸として、全学的な独自色を大きく打ち出す取組を行う私立大学等を重点的に支援するという方針が打ち出されました。関西大学は2016年度に「人に届く」関大メディカルポリマーによる未来医療の創出のプロジェクト、翌2017年度にはオープン・プラットフォームが開く関大の東アジア文化研究事業が採択されました。２年連続での採択は全国で７校、関西では本学のみの快挙となりました。

内田　文部科学省の「私立大学研究ブランディング事業」で「関西大学ブランドとは何か」という議論が起こった時に、理系ではKUMP、文系ではKU-ORCASに白羽の矢が立ちました。関西大学は江戸時代に大坂にあった漢学塾・泊園書院がルーツの１つとなっており、1951年にはその流れを汲む東西学術研究所を設立し、長年にわたって東アジア文化研究において大きな成果を挙げてきました。とりわけ近年では、文部科学省「グローバルCOEプログラム」などにおいてめざましい研究成果を挙げており、「東アジア文化研究の関大」として世界的な認知を受けています。支援事業に合わせて昨日や今日に立ち上げたプロジェクトではなく、長年受け継がれてきた学統の上に立ち上げられたのが、関西大学アジア・オープン・リサーチセンター（Kansai University Open Research Center for Asian Studies：KU-ORCAS）です。

沈　本プロジェクトは、泊園書院からおよそ200年にわたって脈々と受け継がれてきた東アジア文化研究の伝統のもと、2005～2009年度に文部科学省「学術フロンティア推進事業」、2011～2015年度の「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」、さらには、2007年度の文部科学省「グローバルCOEプログラム」といった実績を踏まえて、2017年の「私立大学研究ブランディング事業」採択を受けて、2021年度を着地点として計画されたものです。人と世界に開かれたデジタルアーカイブの構築とその活用を目標とし、さらには関西大学のブランド確立を目指して、事業を推進してきました。内田先生のご勇退に伴い、現在は私がセンター長を引き継いだ形となっています。

内田　本プロジェクトは、知識基盤社会を支える上で重要な役割を果たす「デジタルアーカイブ」の構築が１つのテーマとなっておりますが、デジタル化そのものが最終目的ではなく、あくまでそれを研究にどのように活かすのかということに重きを置いています。私は図書館長を務めた経験もあり、当時より「秘蔵は死蔵」という信念のもと、優れた研究資源は広く社会に公開されるべきであると考えています。とりわけ人文学研究の分野では、保守的な風潮が強いのか、自分の研究資源をオープンにするという考えはあまり普及していません。しかし、本プロジェクトにおいては、これまでの学問領域や人の垣根を越えた新たな人文知の創造に向けて、研究リソースのオープン化、研究グループのオープン化、研究ノウハウのオープン化という「３つのオープン化」をポリシーに掲げています。これにより、世界に開かれたハブ的機能を備えたオープン・プラットフォームを形成し、

前田　裕　MAEDA Yutaka

1981年大阪府立大学大学院工学研究科電子工学専攻修士課程修了。79年大阪府立高等学校教諭。88年関西大学に着任し、2002年工学部教授。システム理工学部長、大学院理工学研究科長を歴任し、12年副学長。同時に研究推進部長、社会連携部長、15年国際部長を兼任。20年10月関西大学学長に就任。公益財団法人関西生産性本部理事。公益信託滝崎記念アジア留学生奨学基金運営委員。財団法人大阪科学技術センター参与。

沈　国威　Shen Guo-Wei

1978年黒龍江大学日本語学科卒業。1979年北京外国語大学修士課程入学。
修了後、北京語学院に勤務。1985年国費留学生として来日。
1991年大阪大学大学院文学研究科・外国語教育学専攻博士課程修了。
2001年より関西大学外国語学部教授、
2020年東西学術研究所長、
2021年KU-ORCASセンター長に就任。

世界最高水準の東アジア文化研究拠点を形成すべく活動をしています。

前田　残念ながら、文部科学省の「私立大学研究ブランディング事業」は2019年に唐突に支援終了となりましたが、大学として「関西大学ブランド」を確立するという事業は極めて重要な位置づけとなっていますので、独自に予算を計上して事業継続を決定いたしました。

内田　我々研究者としても研究目標を途中で投げ出すことは信義を問われる問題であり、なんとしても本事業を継続していくべきだと考えていたので、関西大学法人及び大学執行部の全面的な支援によって事業が継続できるようになって大変感謝しております。

あらゆるしがらみを越えて貴重な資源を解き放つために

前田　ここからは具体的な実績について振り返ってみましょう。内田先生はこれまでにどのような成果があったとお考えでしょうか。

内田　まず本プロジェクトの立ち上げる際に、研究リソース、研究グループ、研究ノウハウという３つのオープン化をポリシーに掲げました。これに研究成果が加わって、現在は４つのオープン化を実現しています。デジタルアーカイブのコンテンツ数は目標の約300%を達成しており、これにより関西大学が保有する貴重な文献などの研究資源を世界中で活用できるようになりました。このデジタルアーカイブそのものに素晴らしい価値があるのですが、我々はさらにこれらを活用する研究者の育成、研究ノウハウの共有化などに取り組んできました。

沈　文献をデジタル化する上で文字の構造が比較的単純なアルファベットならばOCR（光学文字認識）で機械的に処理することが可能なのですが、文字の構造が複雑な漢字の場合はそうはいきません。我々の場合はここにコストをかけて手作業でデジタル化をしています。最新技術とアナログ作業の融合したノウハウを確立したことに意味があると考えています。例えば、私の研究では近年あらゆる分野で注目が高まっているビッグデータを活用しています。中国語の語彙の研究において、ある単語がいつ頃から流行し始めて、その周辺にはどのような言葉が使われていたのか、膨大な情報量を持つコーパスから瞬時に分析できるプラットフォームを構築しました。これによって言語が持つ概念がどのように解釈され、受け入れられていったのかを知ることができるようになり、歴史の真実を解き明かす研究に大きく貢献することが期待されています。

内田　もう１つの大きな功績としては、「サイロ問題」に一石を投じたことです。これは東アジア文化研究のみならず、さまざまな研究分野で大きな問題となっている現象で、個別の研究機関が独自のフォーマットでデータを作成するため、膨大なコストがかかってしまう上に、貴重なデジタルデータの互換性が低く、十分に活用されないという事態が起こっていました。これに対して本プロジェクトでは、コンテンツを「サイロ」から「解き放つ」ことを目標に掲げています。デジタル画像相互運用のための国際規格に関しては、近年世界的に普及が進んでいる「IIIF（トリプルアイエフ）」に準拠したデジタル化公開を行っています。

前田　内田先生がおっしゃる通り、「サイロ問題」は多くの研究分野が抱える共通の課題です。私のような理系畑を歩んできた人間にとっても身近な問題で、企業や研究機関による独自規格が乱立し、市場競争の中で勝ち残った規格がいわゆるデファクト・スタンダードとして採用されるという現象が繰り返し行われてきました。これはオープンな市場のみならず、学内でも起こりうる現象で、各部署間におけるフォーマットの違いは大学全体として取り組むべき課題の１つとして議論してきました。今回、KU-ORCASが示した「IIIF（トリプルアイエフ）」に準拠したデジタルアーカイブの構築は、こうした課題を解決に導く大きな可能性の１つだと注目しています。

世界とのつながりから世紀の発見につながる可能性も

前田　関西大学は2017年に日本の大学で初めて、バチカン市国にあるローマ教皇庁のバチカン図書館と協定を締結しました。国際的な功績という面ではこちらのインパクトが大きかったですね。

内田　関西大学、ローマ大学、北京外国語大学との間で結ばれた学術協定によって東アジア文化研究に新たな一歩が刻まれたと自負しています。バチカン図書館

は15世紀に設立された世界最古の図書館の１つで、コレクションの中にはイエズス会の宣教活動によってもたらされた東アジアに関する資料も見られます。日本関連の資料も収められており、どのような経緯でその資料がバチカン図書館に辿り着いたのかを解き明かすことで、もしかしたら世紀の発見があるかもしれないという期待が寄せられています。

前田　そのような期待を受けてKU-ORCASでは研究サポートを募るクラウドファンディング「バチカン図書館に眠る日本関連史料を紐解き、世紀の発見にチャレンジ！」を実施したところ、想像以上に大きな反響がありましたね。

内田　はい、目標額を大きく上回るご支援をいただき、スタッフ一同心より感謝すると共に、その期待の大きさに身が引き締まる思いでした。KU-ORCASは、普段は目にすることができない資料をデジタル化することで容易に閲覧してもらうことを目標としています。今回のバチカン図書館収蔵未公開日本関連資料のデジタル化もその延長線上にありました。クラウドファンディングの成功で、貴重な史料のアーカイブ化が実現し、より多くの人と歴史的発見の瞬間を共有できるのではないかと期待しています。

「本物」に触れられる場として、世界中から研究者が集まる拠点へ

前田　５ヵ年のプロジェクトの最終年度を迎え、内田先生よりセンター長を引き継いだ沈先生としては、今後の展開についてどのようにお考えなのかを教えていただけますでしょうか。

沈　本プロジェクトは内田先生の有終の美を飾るにふさわしい素晴らしい実績を残してきましたので、ここで終わりにするにはあまりにもったいないと考えています。センター長を引き継いだ私としては新しい展開を模索していて、その１つがKU-ORCASを文部科学省の「共同利用・共同研究拠点」に申請することです。図書館とも連携して関西大学が保有する素晴らしい研究資源をオープンにし、東アジア文化研究の裾野を世界に広げていきたいと考えています。さらに将来的な構想としては関西大学に「東アジア研究図書館」を作り上げ、世界中の研究者が関西大学を訪れるような環境を整備したいと考えています。東は「東大U-PARL」、西は「関大KU-ORCAS」という認知が世界に広がることを目指します。

内田　デジタル化の素晴らしいところはクリック１つで膨大なデータベースにアクセスできるところですが、同時に次の世代を担う研究者には「本物に触れる」ことの大切さも忘れないでほしいと思います。紙の質感に触れながら書物と格闘する経験が研究者にはどうしても必要です。そのためにも関西大学には世界中の研究者の集まる拠点として発展していくことが求められているのではないでしょうか。

前田　人の往来という面では未曾有のコロナ禍で我々の行動は制限され、大学としても教育・研究活動に大きな影響がありました。KU-ORCASの活動についてはいかがでしたでしょうか。

沈　確かに海外から関西大学を訪れたり、我々が海外に赴いたりする機会は大幅に制限されてしまいましたが、テレワークやWeb会議などが普及したことに伴い、オンラインでの交流が非常に活性化しています。関西大学を「デジタルビジット」する研究者も多く、内田先生と私はかえって忙しくなったくらいです。フランスやポルトガルでのシンポジウム、中国などでの講演会などに参加し、内田先生の講演には約1,000名もの研究者が参加するなどこれまでの常識を覆すような展開を見せています。

内田　私自身、ZOOMなどのWeb会議システムは名前を知っているくらいで使ったことがありませんでしたが、今では授業だけでなく、さまざまな会議やシンポジウムをZOOMで行うことが当たり前となっています。アフターコロナの世界ではこれがニュースタンダードとして定着することでしょう。我々が構築したデジタルアーカイブは、こうした時代にこそ、より重要な役割を果たすものであると確信しています。

前田　KU-ORCASが生み出した数々の功績は関西大学の貴重な資源の蓄え方、活用の仕方にも新しい風を吹き込んでくれたと感じています。この流れを絶やすことなく、学内外にあるあらゆる垣根を乗り越え、後世に残すべき資産を誰もが有効に活用できる「関西大学モデル」を世界に示していきたいと思います。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

内田 慶市　UCHIDA Keiichi

1978年大阪市立大学大学院修了。
1978年福井大学教育学部講師、1980年同助教授。
1990年関西大学文学部助教授、1992年同教授、2009年外国語学部教授、2017年KU-ORCASセンター長に就任。
2021年関西大学名誉教授、東西学術研究所客員研究員。

ユニット1主幹
外国語学部教授
奥村 佳代子

東西文化接触とテキスト

アーカイブ構築からデジタル・ヒューマニティーズ（DH）を目指して

今年度の活動状況

ユニット１では、東漸した西洋文化のひとつとして、近代中国における西洋料理の研究に取り組んできました。

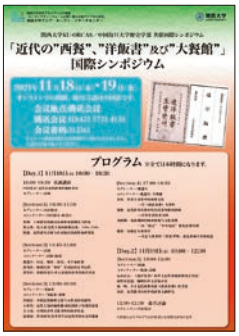
その成果発表の第一弾として2019年度にシンポジウム「近代東アジアにおける西洋料理の伝播と受容」を開催しました。2020年度には上海復旦大学での国際シンポジウム開催と上海で最も古い西洋料理レストラン「紅房子」での当時の料理の再現に向けて準備を進めていましたが、COVID-19による活動制限のため、実現できないままでした。

ただし、その間も『『造洋飯書』の影印』を出版するなど、地道な研究を継続した結果、11月18、19日に成果発表第二弾となる国際シンポジウムのオンライン開催が実現しました。

国際シンポジウム「近代の“西餐”、“洋飯書”及び“大餐館”」は５つのセクションに分かれ、近代における東アジア、特に上海での西洋料理受容、中国の土着の食文化と西洋との邂逅、アジアにおけるコーヒーをはじめとする西洋の飲み物の受容、個別の文献資料や事例から捉えることのできる異文化としての食文化などのテーマに基づき、19人の研究者が発表しました。東アジアと西洋料理を多角的に捉えた特徴的なシンポジウムとして充実したものとなりました。

2017年度～2021年度の総括

複数回にわたるシンポジウム開催のほか、近代漢語文献データベースの内容を充実させ、安定した運用の維持に努め、東アジアデジタルアーカイブを新たに構築し、公開資料数の充実に取り組み、DHに資するデジタルアーカイブとしての基礎を固めました。また、バチカン図書館での資料調査や山東大学の漢籍目録プロジェクトの目録作成に参画するなど、他研究機関や図書館との連携を深めました。



造洋飯書ポスター

ユニット2主幹
文学部教授
吾妻 重二

泊園書院の学問ネットワークと大坂画壇アーカイブ

今年度の活動状況

2021年９月に『「南岳百年祭」記念論文集』を刊行しました。昨年開催した藤澤南岳没後百年シンポジウムの論集で、泊園書院に関する最新の研究成果です。11月には東西学術研究所で国際シンポジウム「内藤湖南と石濱純太郎―近代東洋学の射程」を開催、コロナ禍にもかかわらず、国内外の多くの研究者がオンラインにより発表しました。アーカイブ作業としては泊園文庫貴重書、藤澤家および三崎家寄贈の泊園関係書軸・印章など多くの資料を撮影しました。

「南岳百年祭」
記念論文集

５月４日にはテレビ東京系列「なんでも鑑定団」においてKU-ORCASデジタルアーカイブの公開する本学図書館所蔵「四庫全書」が紹介され反響を呼んだところです。

2017年度～2021年度の総括

2017年度以降、ユニット２は「東アジアの中の大阪の学統とネットワーク」を総合テーマとして活動を展開し、データベースを蓄積・公開してきました。

KU-ORCASキックオフセミナー（2017年）に始まり、国際シンポジウムとして「大坂画壇と京・大坂の文化ネットワーク」、「東西学術研究と文化交渉――石濱純太郎没後50年記念国際シンポジウム」（2018年）、「大坂画壇と京の文化をめぐる研究と展覧会企画」（2019年）を開催し、成果を内外に発信しました。また展示会として京都国立近代美術館・大英博物館などとの協同で「日本・イギリス共同研究展・大坂画壇の絵画」（関西大学博物館、2020年）を、さらに「石濱純太郎とその学問・人脈」（2019年）、「藤澤南岳の書と芸術」（2020年）を開催、展観目録も刊行して好評を博しました。

アーカイブ関連としては「WEB泊園書院」の充実と全面リニューアル（2017年）、「泊園文庫デジタルアーカイブ」と「泊園印章デジタルアーカイブ」の公開（2019年）、「大坂画壇デジタルアーカイブ」（2020年）の公開と続き、本学所蔵の貴重なリソースを世界中の研究者や愛好家が利用できるものとして発信し、本学のブランド強化に大いに貢献しました。

国際シンポジウム
「内藤湖南と石濱純太郎
―近代東洋学の射程」

ユニット3主幹
文学部教授
西本 昌弘

古都・史跡の時空間

金石文拓本・古典籍の調査と終末期古墳の発掘

今年度の活動状況

関西大学所蔵の古典籍と金石文拓本資料を調査し、昨年度実施した明日香村の中尾山古墳の発掘調査に関する報告書の作成を進めました。これらの研究成果を盛り込んだ論文を『KU-ORCASが開くデジタル化時代の東アジア文化研究』に執筆し、金石文拓本や中尾山古墳の調査成果は、関大主催の市民講座などで報告しました。

また、KU-ORCASと東西学術研究所の共催で、以下の研究例会を開催しました。

2021年12月17日（金） 児島惟謙館第一会議室（Zoomオンライン併用）

貫田瑛（関西大学大学院）
「義真・円澄と中国天台」
宮嶋純子（関西大学非常勤講師）
「越南版『往生集』「法供芳名録」にみる19世紀北部ベトナムの寺院と村落」
鈴木景二（富山大学教授）
「行基の事績の再検討」

研究例会ポスター

2017年度～2021年度の総括

関西大学博物館所蔵の金石文拓本資料、同図書館所蔵の古文書・古典籍などのなかから、飛鳥・難波・奈良・京都など古都・史跡に関わるものを選び調査・撮影しました。このうち岩崎美隆文庫本・内藤文庫本・長澤文庫本などの写本類の一部は東アジアデジタルアーカイブで公開されました。

飛鳥史学文学講座

飛鳥時代の古墳の発掘調査を実施し、関連研究を進め、その成果を広く発信することができました。なかでも2020年度に調査を実施した中尾山古墳によって、古墳の終焉と火葬が始まる頃の様子が明らかとなりました。また、「百舌鳥・古市古墳群」の世界遺産登録が決まった2019年度には、シンポジウム「世界文化遺産へのあゆみ百舌鳥・古市古墳群と関西大学」を開催し、多くの参加者を得ました。

毎年研究例会を開いて議論を深め、研究成果をメンバー間で共有しました。毎年開催された明日香まほろば講座（2020年は中止）、飛鳥史学文学講座では古都・史跡に関する研究成果を広く市民に紹介しました。

ユニット4主幹
特別任用准教授
菊池 信彦

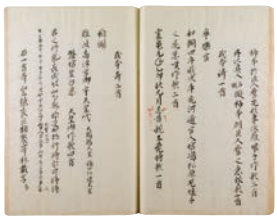
古典籍資料の情報資源化

これまでの活動とオープンデータの意義

今年度の活動状況

ユニット4の2021年度進捗に、残念ながら目立ったものはありません。これは、そもそもこのユニット4が科学研究費補助金の獲得を前提として作成されたユニットであったためであり、その獲得ができなかったことから研究を進めることができなかったからです。しかし、進捗がないからといって学術的貢献が何もなかったというわけではありません。昨年度までの成果物、すなわち翻刻とそのTEI/XMLマークアップデータをオープンデータとしてGitHub（https://github.com/KU-ORCAS/manyoshuTEI）で公開したことで、そのデータを使った外部の研究が進められています。例えば、2021年12月にオンライン開催された「じんもんこん2021」（主催：情報処理学会）では、このデータ作成の知見が用いられた報告があり、筆者は研究活動の中間生成物であってもオープンデータとして公開する意義を改めて感じることができました。

2017年度～2021年度の総括



最後に、総括としてユニット4の設立経緯とこれまでの活動を振り返っておきたいと思います。ユニット4は、2019年度第四四半期にスタートしました。KU-ORCAS所属教員の多くはテキストを扱う研究を主に行っているにもかかわらず、関西大学デジタルアーカイブでは画像データしか扱っていませんでした。このギャップを解消し、学内における人文学データ作成のノウハウの基盤を築くために、本研究ユニットは立ち上げられました。その際、廣瀬本万葉集という本学にしか存在しない資料を対象とすることで、研究の独自性と意義を主張しやすくしました。もちろん、この資料選択には令和という年号も影響していたことは否定いたしません。また、2019年度ではサンプルデータを数点作成しただけでしたが、2020年度はこの後を継ぐ形で巻2（の一部）を対象にデータ作成を行いました。

本研究ユニットは今年度をもって活動を終了しますが、ここで作成したデータとノウハウは内外の教育と研究に存分に生かしてほしいと願っております。最後になりましたが、ご協力をいただいたユニットメンバーに厚くお礼申し上げます。

KU-ORCAS 研究集会開催レポート

日本におけるパブリックヒューマニティーズ／公共人文学の現在地

レポート報告
KU-ORCAS
特別任用准教授
菊池 信彦

概要

2021年11月12日開催

KU-ORCASの最後の研究集会として開催された本イベントでは、興隆しつつあるパブリックヒューマニティーズ（公共人文学）をテーマに、人文学の各領域における現状と課題が議論されました。なお、本研究集会はパブリックヒストリー研究会との共催として実施したものです。

パブリック・フォークロアとはなにか？ ―その可能性と課題―

菅 豊 東京大学 東洋文化研究所 教授

菅報告では、アメリカにおけるパブリックフォークロアの歴史から始まり、パブリックフォークロアの構成要素と事例紹介を踏まえて、パブリックフォークロアに対してどのような批判が寄せられ、それに対してどのように反論するか、実践事例を基に議論されました。

公共人類学と協働の民族誌

関谷 雄一 東京大学大学院 総合文化研究科超域文化科学専攻 教授

関谷報告では、東日本大震災からの震災復興をテーマにした公共人類学の実践をまとめた近著『震災復興の公共人類学』（東京大学出版会，2019）をベースに、学生を伴った福島での学習ツアーやチェルノブイリ原発の訪問調査等について報告をいただきました。

パブリックヒストリーにおけるパブリック

岡本 充弘 東洋大学 人間科学総合研究所 客員研究員（名誉教授）

岡本報告では、パブリックヒストリーについて様々な著作からその流れを概観し、これらを踏まえ、パブリックヒストリーが for the public, to the public から with the public, by the public, about the public or in the public へと拡大していく様子が論じられました。

デジタルパブリックヒューマニティーズの現状と課題

菊池 信彦

菊池報告では、アメリカの事例をもとにクラウドソーシングがデジタルパブリックヒューマニティーズの方法として重要な位置を占めていること、そして、今後は協働を意識したデジタルパブリックヒューマニティーズの方法の開発と実践が課題であると指摘しました。

パブリックアーケオロジー:その発展と現況

松田 陽 東京大学大学院 人文社会系研究科 准教授

松田報告では、パブリックアーケオロジーの歴史から、それが成立・発展した要因を考察した後、パブリックアーケオロジーのアプローチを分類、整理しました。そして、ストーンヘンジ等の具体的事例を踏まえつつ、パブリックアーケオロジーの特徴が論じられました。

KU-ORCAS 国際シンポジウムレポート

東アジアDH研究推進とそのための環境の構築 ―次世代の東アジア文化交渉学のために―

Constructing & Promoting for the East Asian DH Research Environment:
For the Next Generation of East Asian DH Studies

レポート報告
KU-ORCAS
特別任用准教授
菊池 信彦

概要

2021年12月11日開催

KU-ORCASの総まとめとして開催した本国際シンポジウムは、これからの東アジア文化交渉学におけるデジタルヒューマニティーズ（DH）の推進と普及を目指し、東アジアDH研究の現状と課題を国際的な文脈のなかで議論することを狙いとしました。なお、本イベントは「じんもんこん2021」（主催：情報処理学会）との共催として開催したものです。

Introduction for Global Integration of Chinese Ancient Books

Sun Hongyuan 孫紅苑：山東大学博士研究員

Sun報告では、山東大学が進め、本学も協力しておりますプロジェクト「全球漢籍合璧工程調査目録編纂複製作業」（Global Integration of Chinese Ancient Books）について、その計画の背景とプロジェクトの流れ、進捗状況、そして課題等が紹介されました。

A Western perspective on DH research in East Asia and the challenges for cooperation and collaboration

Dr. Simon Mahony サイモン・マホニー：北京師範大学珠海校教授

マホニー報告では、ロンドン大学で長く教鞭をとった西洋の研究者としての視点から「東西」のDH研究の類似性や相違点が議論されるとともに、世界的な規模での協同・協力体制の構築に向けて、その課題が論じられました。

Digital Humanities for Chinese Studies: The International and the Local

Dr. Tsui Lik Hang 徐力恆：香港城市大学歴史学科助教授

Tsui報告では、2009年から本格的にスタートした中国におけるDH研究の歴史について、その前史を踏まえて紹介がなされ、そして、その研究を支えるサイバーインフラについて具体的事例が挙げられながら、中国におけるDH研究の課題が論じられました。

Open-access platform of KU-ORCAS, Past, present and future

奥村 佳代子

奥村報告では、KU-ORCASの5年間の研究成果とデジタルアーカイブ化の取り組みについて、各研究ユニットのプロジェクトとともに紹介がなされました。そして、それを踏まえ、今後の関西大学における東アジアDH研究とオープンプラットフォームの推進を、他機関との連携をもとに進めていく決意が述べられました。

京都国立近代美術館での展覧会開催

サロン！雅と俗ー京の大家と知られざる大坂画壇
―京都国立近代美術館の展覧会をめぐって―

関西大学アジア・オープン・リサーチセンター
非常勤研究員
中谷 伸生

2022年３月23日から京都国立近代美術館で開催される展覧会は、京都と大阪の画家たちの交流を紹介する企画となっている。池大雅、与謝蕪村、円山応挙、鶴亭、西山芳園など、江戸時代後期の美術界を牽引した画家たちと並んで、近年に入って忘れられた大坂画壇の画家たち、たとえば、十時梅厓（とときばいがい）、森周峯（もりしゅうほう）、耳鳥齋（にちょうさい）、西山完瑛（にしやまかんえい）、佐藤魚大（さとうぎょだい）など、18世紀から19世紀にかけて活動した画家たちの作品を展観し、京都と大阪で展開された活発な美術活動を紹介する。この企画は、過去５年間にわたって積み上げられてきたイギリスと日本の美術史研究者による「研究に基づく展覧会」を実現させたもので、単に埋もれた画家たちを美術愛好家に知らせるという域を越えて、日本美術史研究や美術館活動の在り方について、ひとつの型を示す企画である。

図１　京都国立近代美術館

＊

この展覧会が実現するまでには、京都国立近代美術館、イギリスのロンドン大学SOAS（アジア・アフリカ学部）、大英博物館、関西大学アジア・オープン・リサーチセンター（KU-ORCAS）の４機関が中心となり、以下のような研究集会を開催し、実績を重ねてきた。研究集会へ参加した主要メンバーは、大阪商業大学の明尾圭造、大阪歴史博物館の岩佐伸一、ロンドン大学のアンドリュー・ガーストル、フランクフルト大学のミヒャエル・キンスキー、大英博物館（研究員）のティモシー・クラーク、関西大学（名誉教授）のスコット・ジョンソン、リーズ大学（名誉教授）のエリス・ティニオス、関西大学（名誉教授）の中谷伸生、大英博物館のロジーナ・バックランド、同じくアルフレッド・ハフト、京都国立近代美術館の平井啓修、関西外国語大学のポール・ベリー、大英博物館の矢野明子らである。

図２　大英博物館での調査

図３　大英博物館

加えて、展覧会カタログへの執筆における主要参加者は、静岡大学の高松良幸、大阪大学の橋爪節也、大阪工業大学の松浦清、大津市歴史博物館の横谷賢一郎らの名前が上がる。（アイウエオ順・名誉称号以外の肩書敬称略）

＊

【日本・イギリス共同研究に係る研究集会】

1）“Salon Networks in Osaka: ‘Kimura Kenkado’s Salon and its relationship with Ueda Akinari, Kontonsha Chinese Poetry Group, Baisao and Daiten Kenjo”、The Symposium”The Role of Art and Literature Salon in 18th and 19th Century Japan”、ロンドン大学SOAS（イギリス・ロンドン）で開催、2016年９月６日。
※研究集会終了後に大英博物館で作品調査と日英ほかの研究者間での討議

2）「18・19世紀日本の芸術文化サロンの役割」、EAJS国際学会、リスボン大学（ポルトガル・リスボン）で開催、2017年９月２日。

3）「大坂画壇と京・大坂の文化ネットワーク」、KU-ORCAS国際シンポジウム、関西大学マルチメディア教室（日本・大阪）で開催、2018年７月28日。

4）「大坂画壇2021年展覧会企画をめぐって」、The joint research project, “Osaka Painting and Kyoto-Osaka Salon Culture”, ロンドン大学SOAS（イギリス）2018年10月24日。

5）「大坂画壇と京の文化をめぐる研究と展覧会企画」（東西学術研究所国際シンポジウム・東と西の文化交流－書・

文・絵－)、関西大学以文館で開催、2019年８月２日。
※研究集会終了後に関西大学図書館で作品調査と日英ほかの研究者間での討議

6) 関西大学博物館2020年度冬季企画展「大坂画壇の絵画－日本・イギリス共同研究展（2020年12月14日～2021年１月23日（主催：関西大学博物館、関西大学アジア・オープン・リサーチセンター（KU-ORCAS）

7) 日英共同企画「サロン！雅と俗－京の大家と知られざる大坂画壇」展、京都国立近代美術館（2022年３月23日～５月８日）

＊

以上の研究集会、研究者間の討議、作品調査を、日本、イギリス、アメリカ合衆国の研究機関に勤める研究者たちが共同で進め、展覧会の実現へと向かっている。日本美術史の研究は、明治の思想家の岡倉天心〔覚三〕（1863－1913）が、明治23年（1890）から25年（1892）にわたって東京美術学校で講義した「日本美術史」に端を発する。その講義に出席した若い研究者たちが、その後に活字化したのが、現在、われわれが目にする『日本美術史』（平凡社ほかで出版）である。この講義録では、江戸（東京）と京（京都）の画家たちの紹介が中心となっており、大坂（阪）は完全に排除された。その影響は大きくて、以後、大坂画壇の画家たちは、多くの美術史家たちの研究対象から外され、ほとんどが忘れられたのである。

こうした経緯を踏まえて、京都での展覧会は、大坂画壇の画家たちを網羅的に紹介する。これまで、京都画壇の絵画も、京都の枠内で研究が完結するやり方であったため、大坂（阪）との関係については研究が十分に広がらなかった。たとえば、京の長澤蘆雪についても、従来の研究では、円山応挙の弟子で京の画家という位置づけがなされ、大坂との関係を論じる研究はほとんどいなかった。しかし、蘆雪に見られる流派を越えた多様な作風、また、「蛙図」や「蛇図」を好んで描く姿勢などは、大坂画壇の画家、たとえば、林閬苑や松本奉時や葛蛇玉らと共通する。すなわち、京都画壇の画家たちも、大坂を含めて考えれば、意外な側面が露わになる。

＊

さらに、近代の大阪画壇においては、北野恒富や菅楯彦らが活躍したが、近代絵画史の研究書や概説書に二人が登場することはほとんどなかった。東京の鏑木清方、京都の上村松園と並ぶ実力者の恒富については、近年、ようやくその全容が浮かび上がりつつある。日本近代絵画史の代表作の一点である恒富の《蓮池》（1927年・耕三寺博物館蔵）の奥深い作風は、これまで研究者から「見逃されてきた」というだけではすまない。この作品を無視して、近代絵画史が成り立つのか、といってもよいほどの、いわば深刻な状況である。加えて、鳥取県倉吉出身で、大阪で活動した菅楯彦の作品は、あまりにも独創的・個性的で、美術史家が、その作品についてゆけず、今なお理解されないという哀しい状況である。この機会に、楯彦の巻物《きつねよめいりの巻》（1922年・関西大学図書館蔵）をぜひ鑑賞してもらいたい。

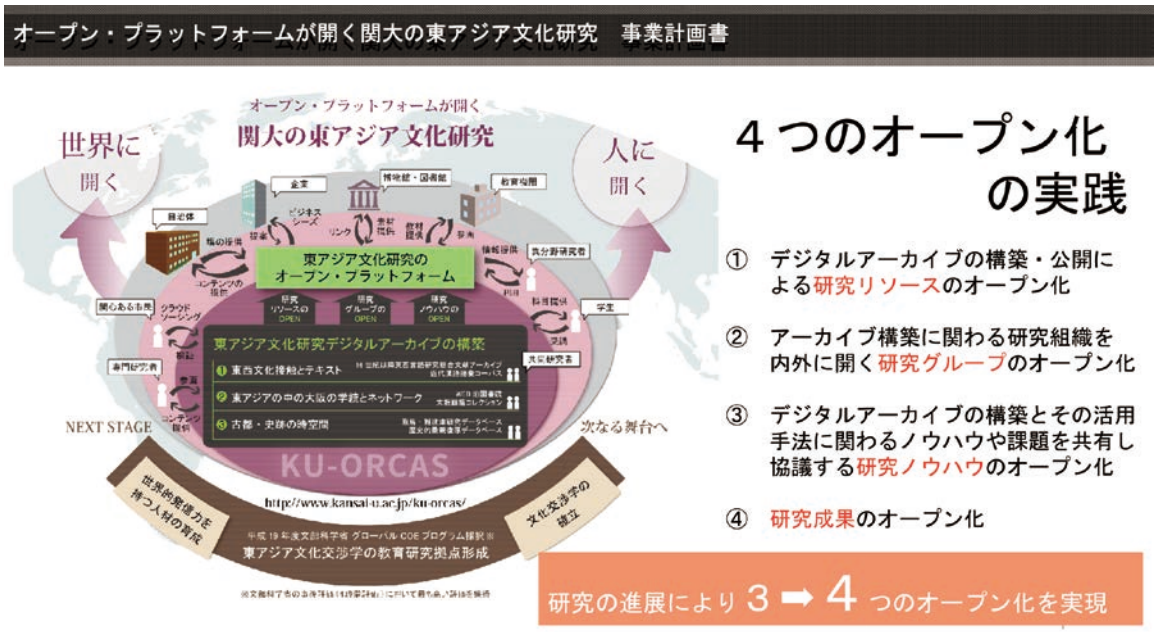
今回の展覧会では、以上の問題意識を鮮明にするために、「サロン」というキーワードを用いて、京都画壇と大坂（阪）画壇の画家たちの交流に焦点をあて、これまでの日本近世近代美術史をまったく新たな観点で見直すように、京都と大阪の作品理解を深める試みがなされている。

図４　大坂画壇展目録

図５　菅楯彦《きつねよめいりの巻》

注）2021年度の各数値は2022年１月31日時点の予定数

■ 研究成果



デジタルアーカイブコンテンツ数

東アジアデジタルアーカイブ
古文書・古記録
アジアの映画関連資料
鈴澤文庫
長谷川貞信
治園文庫デジタルアーカイブ
治園印章デジタルアーカイブ
大阪圏域デジタルアーカイブ
デジタルアーカイブMINEX
近代漢語文献データベース

目標の319%達成

6，388件（2021年度）
6，195件（2020年度）
4，217件（2019年度）
3，020件（2018年度）
2，000件（2017年度）

UP!!

※達成目標：初年度比から200%

アーカイブコンテンツアクセス数

252%

74，958件（2021年度）
69，494件（2020年度）
29，754件（2019年度）

UP!!

※達成目標：初年度比から300%

論文・図書数

456%達成

128本（2021年度）
93本（2020年度）
199本（2019年度）
15本（2018年度）
21本（2017年度）

UP!!

デジタルヒューマニティーズの発信

※達成目標：100本以上/５年間

学会発表件数

世界の学会で認められたKU-ORCASのメンバー

80件（2021年度）
64件（2020年度）
167件（2019年度）
142件（2018年度）
133件（2017年度）

達成

そのうち招待講演数（累計）
314/576件
学会発表件数の半数超

※達成目標：100件以上/５年間

MLA連携機関数　80%達成

Museum
・大英博物館
・京都近代美術館

Library
・バチカン図書館
・ハーバード大学図書館
・香港大学
・香港中文大学
・香港城市大学
・バークレー大東アジア図書館
・東大U-PARL

Archives
・北京外国語大学データベース
・バチカン図書館データベース
・台湾中央研究院英華字典データベース
・台湾政治大学概念史研究データベース
・山東大学漢学センター国家重点文化事業「全球漢籍合璧工程」

16機関（2021年度）
※達成目標：20件以上/５年間

シンポジウム・研究会開催数

開催数	66回
参加者数	5，935名

※2017年度～2021年度累計

3回（2021年度）
9回（2020年度）　達成
27回（2019年度）　大幅達成
26回（2018年度）大幅達成
1回（2017年度）
※達成目標：3回以上/年

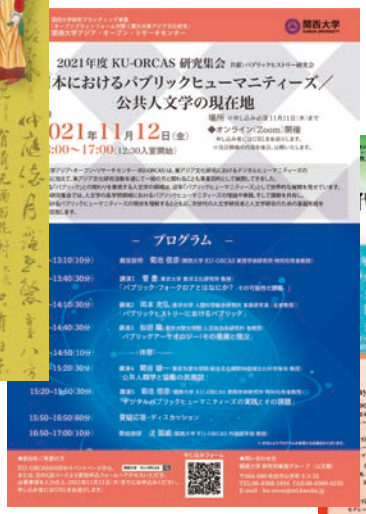
■ KU-ORCAS グッズ

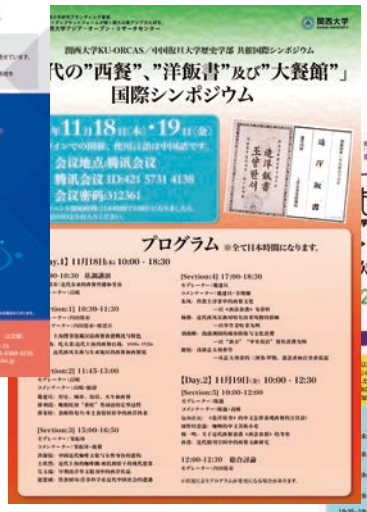
トートバッグ

ステッカー

クリアファイル

■ 各種チラシ





DRAW
YOUR
ASIA

KU-ORCAS

関西大学
アジア・オープン・
リサーチセンター

NO5 KU-ORCAS NEWS LETTER

発行日　2022年3月17日
発　行　関西大学アジア・オープン・リサーチセンター

〒564-8680　大阪府吹田市山手町3丁目3番35号
TEL:06-6368-1834　E-Mail:ku-orcas@ml.kandai.jp

KU-ORCAS WEB SITE　Twitter　Instagram　Facebook　YouTube